常樂智道論

中卷

特67
370

自由の權利を求也

問辨人

ならば五倫を異かばいかに

答て曰く

君臣を塵と見れば其身惡田の上に住臣君に敵悖時は我身を亡

親子を慈見らさる時は其子返しで非道を踏子は親尊敬せさる

時わ老て亦其行を受夫妻を愛せさる時わ他に心迷出妻夫に任

さる時わ則其家闇夜の如長幼を惠まする時わ是其身に厄を招

幼長に順がわさる時わ常に亂を起が如朋友平信あらさる時わ

其競止事無此の如の者を以て野蠻人と云歟則亂世の元結にし

て亂し苦厄の綱を持し是萬民の心胎を縛して豐樂自由の權利

を訶責す何れも微玉ゑ

問辨人

其惡人は生涯善人に返事し出来さるや

答て歌に

鬼も蛇も捨惡持善の身となれは信の深程わしる亂

此故を論して曰く風流神祖須佐の男の尊わ八ッ頭の大蛇を退

治給其時俄に八色の雲立登を見玉いて尊之を形取八重に垣を

造て其中に宮位を建則妻神を寵置玉いて其言の葉に曰く

八雲立出雲八重垣妻籠に八重垣造此八重垣わ

と詠し給是ゑ日本の初文にして尊此言葉を常に樂て荒御心を

和げ給か故に和歌と云亦和歌を詠して樂みの風に流給か故に

風流神とわ名付也

左れは龍わ諸虫にして虫の陽也亦雲の八色わ現たるが故に陽

也亦此神言わ陽氣にして是神道わ進を好で退を好ますわ陽也

左れは神道悟敎わ大蛇より起て陽にあらすや亦印度の釋尊わ

九足八面の鬼に出逢て諸行無常是生滅法生滅々己苦滅爲樂の

謗の聲を聞て正覺成道し玉いて佛道を開給也是鬼わ諸人にし

て陰也亦壁わ陰たるか故に陰也直亦佛わ退を好で進を好まざるは陰也左れを佛道悟敎わ鬼より起て陰にあらすや亦神道わ陽氣にして佛道わ陰氣成處を見ても陰陽成事明也然あ佛敎日本に渡來せし事わ人皇三十代欽明天皇の御宇也一說ハ神功の一此世を畧す也時廐戸の皇子聖德太子わ佛を信じて信洲川中嶋に始て善光寺を建立して渡來の佛胎を安置す亦人皇三十五代舒明天皇六年正月元日に大和葛城上の郡芋原の鄕に役の小角出生して成長の後神祇集たる處の深山を開て現世の衆生を助けんとて同國金剛山大峯山を開ぬ而て日く諸々の高山には皆神祇有と雖余說は畧則金剛山の地主神は一言主の明神大峯山は金精大明神也亦修驗を山武士と云わ役の小角行者降魔の利劒を持して山中に住て惡魔降伏仕給故也亦天台宗の祖師傳敎大師わ人皇五十代桓武天皇の御宇延曆廿四年七月叡山に神氣有を知りて此山を開る、其時大師阿耨多羅三藐三菩提の佛達我立そまに妙賀あらせ玉へと誦て自弁を持し一番に山入したるわ若山神の怒あらは崇は我身にうけんとの心成べ去然に法華經と止觀とを以て宗門を建立す亦宗号を天台宗と名付しわ支那の天台山の經法を以て立たる宗門成が故也眞言宗の祖師弘法大師わ人皇四十九代光仁天皇の御宇寶龜五年六月十五日に出生有て後高野山に母生明神高野明神等の神祇有を知りて當山を開大日經蘇悉地經金剛盤若經を依經となす法華宗の祖師日蓮上人わ人皇八十五代後堀川の院貞應元年二月十六日に出生有て後法華經一部を執て餘經にかゝわらす宗門を建立し身延山に神祇有を知りて此山を開きぬ此の如に現世の祈禱をなす宗門は皆神氣集たる處の高山を本山とする亦神祇の通力にてあらずんば衆力現事難禪宗は楞加經首楞嚴經金剛盤若經を依經として宗門を建立すと雖敎外別傳不立文字とは云悟道を旨とする故に祖師榮西長老わ西京府中に建仁寺を建立す五山何れも町中を遠さらす淨

土宗わ無量壽經觀無量壽經阿彌陀經此三部經に往生淨土の論を加ゑ念佛を進西方極樂に往生すると敎祖師は法念上人なり眞宗の祖師親鸞聖人わ淨土の三部經を執て念佛一向の宗門を開く其念佛の口釋の書に神佛隔にすべからすと說たり此の如くに陰陽和合して其敎を爲時わ則國家の太益也と雖神道わ佛を憎佛道わ神を嫌などなさば卻て我眞道を損じて其權利を得事無としり玉ゑ

問辨人

然らば亦宗敎の先祖わ何れなるや

答て歌に

冊誘て天照す日の本わ抑しるや木毎に花を咲也

此の如に我國わ伊弉諾伊弉冊の尊の陰陽の御神が天照大神を始として諸神を產玉いて人種を開天照大神わ世を照開大國主の神は國土を開て萬人を住わせ五學の道を覩開須佐の男の尊は

和歌を造て樂みの風に流の速智の悟を開皇神の御孫の神たる大君の尊わ代々に現じて御代を敢に治開給也此の如成が故に五開神とは申奉左れた日本は冊誘の尊を天地にして天照大神を先祖となす故に神道を元として其宗敎の直成處を信ずるを以て則五行の道とわ云亦此の如に萬物を開て皆民もはるや木毎に其花咲せ給處の神の惠を異て外國の宗敎斗りを信する者わ其梅の根を絕て五行の花を散が故に其身の信心は信心にわらすして則國賊也と云が如の者で有まするを然に萬國に開たるの宗敎は神道諸々の苦み危いを除くゑを云也佛道惡いも佛の心に佛げて樂ひを云儒道儒さ人と成て能さ事を儒すを云猶太道猶さ人の子も我子に猶しく猶ならうを云耶蘇道我國の先祖たる耶ち元に蘇るを樂みに爲すを云の凡此五道にして此の如に宗敎を以て信の道とはなすと雖其信を面に覩て內心わ惡逆を工みて諸國を奪わんとする處の魔道宗が有まするそ

問辨人

其魔道宗とは何宗を目的にして云わるゝや

論主

外で無耶蘇宗の如きを云

問

ナニ耶蘇宗とな夫は何成道利を以て申さるゝや

論主

ヘイ其譯と申るは則耶蘇は此日本に來て國の先祖たる神と營て之を亡さんとなすわ國を奪わんとするの工み有か故にあらすやいかに

問

こわ愚成事を申者かな抑耶蘇教に尊敬なす處の天帝が是世界の萬物を造給が故にこそ萬の人民も此土に住て安き月日を送物也左れとも日本の野蠻人わ其辨も無して用にも達さる處の神を奉て尊耶蘇の惠を知らざるが故に此野蠻國にも則耶蘇の悟を開て其樂みを得させんが爲に教をなすに左樣成難題を云掛るわ其神道仕所謂魔道宗にあらすや

論主

だまれ耶蘇我其道をしらすと思や是耶蘇教の大盲たる十誡中にわ汝等必人殺をする事勿汝等盜賊をする事勿と說しにあらすや然に西班牙は耶蘇教に改宗なすを名として印度を征せしにあらすや亦宗教を改良するの事ならばなぜ大軍の兵を指向しや亦其天帝と申るわ則人種の元祖を以て奉の處也故に日本わ天照大神を以て天帝とわなす故此天帝あらざる時わ天地の道利わ誰がなすや亦世界わ五人種わ離有にあらずや然るに耶蘇の天帝わ何と云子を持て此日本にし何成血緣有や亦子孫無して其家立や亦之無は空の說也直云世界の道利わ地れ行て天に化故に龍わ地に生して天に登と云是地の行て天に化の處也亦惠をなすわ天成が故に其惠を以て天帝と云歟譬は諸生わ其節

に逢て其形を現は是天地陰陽の惠有か故也然るに其人の始も此道利に伏故に陰陽の道を守行うわ人の信の常にあらすや故に日本わ神の治し神國なれば第一神を奉て其直の道に順てそ是陰陽の道を守行う處の信にあらすやいかに

一人の曰く

御両名の競わ中々面白有ま玄たが其論意に順して一舌云ます

まことと虱を去蚤ならす雲蚊の敵を防蚊屋

御諸君此虱蚤蚊の三毒わ何より生じまするやいかに

答論なす人無ば演ます則虱わ常の怠にして蚤わ國賊蚊わ其逆なす魔道國の大敵也此故わ則怠わ貧の元にして亦己の肉を損也亦怠わ身の塵にして其塵より虱生じて其身の肉血を喰物也亦蚤わ其家の塵より生じて其家の人の肉血を喰ふ亦蚊わ他方の塵より生じて何國よりか飛來て其蚊張の中に征入なり然に今の有樣を見に魯西亞わ宗教の爲に人民を救を言覩として戰を起て土耳其亡其勢有にあらすや而して我國にも其宗教流行して國民を迷わすわ則血肉を喰處の蚊にあらすや亦之に迷て國民の肉を喰わんとするも我國民成か故に是其蚤に等にあらすや掛虫の國に流行なすわ則社人の其教に怠か故也而て見れば其社人わ虱也と云か如の者にあらすや亦出家わ其教甚しきと雖其出家が出家の心無きと云歟是神佛わ陰陽也と雖其眞宗も神を尊敬せざる時わ是耶蘇宗と同類にあらすや然に御諸君此三毒の虫わ如何して防退有やいかに

答て曰く

陰陽五行の備を以て防退すべし此故わ則國家の心わ衆議院の諸君子の知る亦人民の心わ神佛の宗道を保處の諸教人の知る亦戰場の心わ國家賢護の侍人わ知らるゝ處也左れは君子侍人教人民人の此四つわ是大君に順て心連合なす時わ陰陽五行の形也而して君子わ國家の堅利を求其教人わ是國民の眠を覺さ

せ智色を進て蚤と虱の毒塵を退ず亦侍人わ國に臺場の蚊屋を張鉄砲の煙を以て雲蚊の敵を制する歟則日本神の其勇氣の火玉を發て大歟を亡亦民人わ大君の尊の恵を蒙敬侍君子の此三司に順いて迷の塵を退ずる時わ其歟何程侃共虫に等小子なれ乞之を抓殺わ最安事にあらすや是御諸君何とそよでわ有ませんか

ヒヤ〳〵其意に順して揖敬歌を詠ます故誰歟一々答論あれ

一人の日く然らを小子和歌を以て答辨せん

ならを一舌申ます

一に異國が訶來ても日本神拔惕其刀風に木の葉武者秋おもまたで散にけりあら面白や〳〵

此意わいかに　答て曰く

其時わ鋸の山を踏摧鬼を狩して修羅を樂む

二にわ錦を心だに纏ぬる身わ常にして袖に光てそ氷の世迄も赫けり嘸々驚や〳〵

太閤の智惠あらなくは豐富や昔の賤の名も殘らなん

三に櫻の花かだに敷智勇の色艶を御代に咲せて其時に嵐も戯吹ばふけ此身の花も散ば散唯嘆よく消失て薫殘わ侍の道そ

鶏鶴の長き命も限あり其人の名わいつの世迄も

四にわ退事勿譬木の葉わ散そ共秋の嵐は覺悟也我日の本は昔より淋らぬ御國と菊の花咲羅わ君か德

其秋に木の葉散して余わ淋ど和國わはるそと菊の花哉

五にわ五洲南北利加洲の天かだに光赫日の圓の幡わ御國の面にして賤が軒ばも離無照わ君か惠也嘸々目出たけり〳〵

日月わ照ぬれども大君の光そ無し國の姿わ

六わ老若男女亦貴賤上下の離無皆大君れ子也せは文明開化わ云も更五文の道をおこないて國をそ守孝達よ

梅の花開心わ信也豐保化今日も君か代に來て

七に七歳ともなれは進や進文學に早文明開化して其外國をしるの身か唯我國を守得て名を萬國に顯せよ

花の身も蕾ながらでしるも無開て春の錦成けり

八に耻とわ夫々の道に暗を云べけり故に侍わ勇敢信君子わ智慈貴民の身わ唯順て大君を守ゞ文明開化也

我國わ梅の花そと見つれ共抑世の人わいかに云亂

九にわ國たわ細共名わ萬國に天照神の御示の香身なれば勝下賤の身成とて心塵なる國の爲

我國の昔を問はゝ初春を過し神代の面と答よ

十わ住する我國の君か惠を興身わ敵より先に打果せ時に好ま

ば何の其鬼でも蛇でも取ひしげ

屋わ皆塵にわあらで聊の雲は中々月の星ゞ

除人の日く

貴君の其歌こそ常の樂と成て智色に進處の論と云物で有まゝ

よふが拙者も一舌昔の勇氣を顯申さん

操敬歌

過し昔に亂世を辭玉いて豐臣の其名は今に秀吉に順武者わ大軍の來共心賤け嶽七本鎗の譯其身は尾張名は未だ人も愛智の郡成其中村に金鍬も擂鍛治屋の五郎助が忘かたみわ中々に武勇に猛寅之助十三歳に秀吉の臣下と成て織田淺井氏戰わ淺からぬ初軍せしより諸軍其岩石や峯の城木山彈正討取て朝鮮國の終迄も勇氣の程を現する名わ永世迄も清正と清き社の神とせり蜀の五虎將軍た利し關羽がふるまい此なれや

而も同國清洲にて名わ直桶屋新衛門德わ其子に福島の智勇わ人に正則か其戰功は山崎や天王山の取合ゐ敵を松田が郎等の可兒才藏を生取て臣下となすわ講しき時に不敵の働わ長坂橋の其此處で魏の曹操か百万の兵を白眼で變返す燕人張飛も此ならん

其美濃國主賴藝か流も清き片桐の登忠義わ雲よりも五虎の大將趙雲か雲蚊の如百万の魏の大勢の中よりも阿斗を救は後の此花の脇坂安治は波多野か首を打取て其畑野成草の葉も血しに染ける面影わ盛と見なて直や抑老て益々盛也蜀の老將軍の其是黄忠も相似たり

身わ越前の産にして戰わ加藤心たは曇もあらで喜明敵戰高名顯て其功績わ蜀の五虎將軍馬超を思け利勇氣わ今の益良雄の心に柏屋武則は其武を則守故諸歟順わざるは無し其張邑わ是にひす

世わ治て平野成氏わ絶せぬ長泰が其勇猛わ云も更七本鎗の參會の其酒盛の時にして加藤に一語の冷さわ蜀の李嚴が智色て

そ掛昔の面影に贊開化の花咲て明治を諭君か代に其名も清き神風の唯一節に福島の未だ少さの時にして如も心わ保正が地球の外わしらね共峯坂峠の嫌無天照神に順て廣世界も殘無豐葦原に踏しめて我日の本に戻なわ下萬民に至迄是ぞ御國の豐臣と賀するわ君か威德也嗟羅面白の御代なれや

亦歌に

過昔の曇らぬ鏡見人の身わ爾の世の鏡成けり

皆樣道で有まする此の如の勇氣を常に保ならば數万の大軍征來共恐事わ有ますまい

余人の曰く

君方の歌わ中々氣味能說で有まするが其心を制して云

ほのかにぞ見なにし雨も廻來て我衣手を濡ぬる哉

此の如成か故に用心に國凶ずとわ云也左れど則雲わ雨と見て笠を惕な人わ盜人と見て心を免す而して同く賢聽わ大地に住か如にして陷歟わ海中に船走に似たり覺悟わ國の大惇にして治世に亂を忘わ開花に大風招が如直云舊鼠邻て猫を取では有ません歟

問辨人
然らは其覺悟怠忘の二ッわ何程の相違有や
答て歌に
豐にも蟬わ冷き唐衣まといて暑氣を余處に見る其歌の音わ高
木屋に住に引換下部にはあせをたらしてかせぎける是も浮世
の蟻樣か禍はをそしと松の根に落來蟬の屍おそ穴に運は其秋
厭冬の安氣を思しれ
問辨人
ならは唯働は此世の中は吉と申や
答て曰く
中々左樣の譯にもかすマア能考ても見られよ蟻わ小躰の虫に
して其道義をしる益て人は大躰を保て是萬物の長にあらすや
故に働の唯一ッの惠を以て此世の中を渡者は是人間にして人
間にあらす則眞の人間とわ常に五常の道を守て行慈直周働の

五ッの惠有を以て申するが世には亦
米わ取酒屋わ借の此中に錢とて無は連無かるらん
此の如の者も有とか云ゑり是等の類は人とは申せど蟻より壯
乙にあらすや
問辨人
是人の行は左もあらんが世界の行處の樣はいかに
答て操敎歌に
第一は二ッの陰陽和合して三ッに行ゑ天地人四方中に住人の
身は五行を守六ッまヒくヒくヒ七ッの子にはしつけして八ッれ心を
榮すまヒ九にゑ順十す身は百に反て實を結其常盤木の十反は
千歲を祝の身ならす万々歲の億そもかしき
此の如に人は世に順世は人に順故に世界の行直成時は人亦直
の道を踏人逆をなす時は世も亦逆して穩ならす而して世界の
行處を說て曰く則春中旬より後に至て必大風吹起はいかにと

いるは是冬の寒氣未だ絶ざるゆ地中の暑氣は既に寒氣に戻らんとなす亦世中の寒氣は暑氣に變せんとする故に此寒暑の陰陽競て其氣は風と成物也亦秋中旬の末に好で其風吹返はいかにと申せど則地中の寒氣は元の暑に戻らんとなす世中の暑氣は若に寒氣に變せんとする故也左れば夏中に雨無時は其炎暑地中に籠て地の寒水と競故に必大風吹にあらすや是世の行直ならさるの處也而て亦人は世行に順か故ゑ冬は躰内暑と雖春に至れば其暑氣寒氣に返せんとする故に寒暑の陰陽競て其身の持病の發するは則大風吹か如亦夏は躰内寒氣を結に世中の炎暑に惱まれて其上ならす諸々の生物等陰物を食して秋の陰氣に其陰躰を送か故に此重陰に伏られて終に悪病の友と成は世の逆行に順か故にあらすや

問辨人

モフ其外に世は行無き歟

有まする

善悪を廻車の世の中に伏ぬるは人の異歟

世界時計の如にして廻を以て直とする故に時計と其時に至て其時を損て前後をなさば其時間を亂て其益を得事無故に廻來處の時數を打て亦次の時を鳴の用意をなすこと則時計の智益とし云人亦此の如にして是豐年に逢て凶年の覺悟をなし治世に住て亂世を忘ざるを以て人足人の眞とわ云也而て則世界わ時計に異かざるか故に萬物車の如と云歟水わ十二の行化をなす此故に水草木に登て露と云露木を離て霧と成霧中天に登て雲と化す雲天降て雨と成大地に落て則元の水に戻也亦此五行の陰陽は水氷露霜霧湯氣雨雪黑雲白雲の十行にして天の惠わ天水と云地の行わ地氷と也合して十二の行化と云歟佛説でわ十二の因縁十二を廻時計れ如故に現世の悪行わ則夜見地の五塵界佛わ地獄に落と云亦善道を行者わ極樂世界に産歟高天が

原の五神界也

問辨人

左程未來の事をしるならは其世界に生ヒて其苦樂を爲處の影を見せよ

ハイ見せまする能見たゞ是衆生の靈わ則産滅現幽の差別有故に譬ば一つの間に燭火を置亦一つの間に燭火をおかす暗方より明き方を見れは能見る是産て現世に現たる處の靈にひす亦明き方より暗方は見ゑす是滅て幽たる處の靈にひす左れば此の如にして未來の國の幽靈わ現世の現靈を見事を得と雖現靈わ幽靈の姿も未來も見る事無は是現幽の差別有の處也故に借光現眼を除て保悟幽眼を以て見時わ明也亦現靈は陽にして現を以て直となす故に惡塵の者は逆成が故に其影を幽すにあらすや亦幽靈は陰成が故に幽を以て直とする故に火と成風と成て世に現るゝわ逆にあらすや亦其迷を地獄と云歟則夜見地の五塵界也亦直わ祭土に靈を幽て其靈氣天に通ず是れゞ高天が原の五神界に生を受の處也直說五心は善惡に離ちて善ゝ五樂を守て五神に登樂みを見鬼愚は五惡を守て五塵に降苦を見故に之を則天神地塵人心の三界とわ云左れゞ五文の鏡に遷見れば此の如に現れます

別に曰く

其火は數年を得たる處の骨に雨乘染て是より火を生するとゝ云亦其風わ塵たる處の土中に空氣籠て其氣世に發時之に當者は身に危を受と也亦云人わ木火土金水の五胎成が故に骨わ木暑は火肉わ土血は水心は朽事無が故に金となす故に息わ風にして其命を保と云歟是金鐵心わ一切を行左れは此の如成が故に則怒生する時わ胎わ炎暑ゑ燃が如亦死時は水土の二ッわ地に殘て火風の二ッわ心の一ッに付て去故に怒嫉の止ざる時わ火風と成て迷出也

問辨人
左あらば三界の離行を聞かん
此説わ次の巻に現す

常樂無上智進論中巻終